世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Learning of Nursing Students in Health Promotion Practice

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): health promotion, practice, nursing students 作成者: 小宮, 浩美, 尾内, 雅子, 那須野, 順子, 山本, 摂子, 小泉, 麗, 高添, 寿子, 小山, 千秋, 伊藤, 和子, 古幡, みなみ, 荻野, 雅, 香春, 知永, 齋藤, 泰子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/225

資　料

ヘルスプロモーション実習における看護学生の学び

The Learning of Nursing Students in Health Promotion Practice

小宮浩美[1] Hiromi Komiya
尾内雅子[1] Masako Onai
那須野順子[1] Junko Nasuno
山本摂子[1] Setsuko Yamamoto
小泉麗[1] Rei Koizumi
高添寿子[1] Hisako Takasoe
小山千秋[1] Chiaki Oyama
伊藤和子[1] Kazuko Ito
古幡みなみ[1] Minami Furuhata
荻野雅[1] Masa Ogino
香春知永[1] Chie Kaharu
齋藤泰子[1] Yasuko Saito

要　旨

目的：本研究の目的は，ヘルスプロモーション実習における看護学生の学びを抽出し，今後の実習内容・方法を検討することである．方法：質的記述的デザイン．2013 年度のヘルスプロモーション実習後に，112 名の学生が記載した自己評価表の自由記述欄に書かれた内容を分析対象とし，内容分析を行った．結果：各領域の看護の対象となる人々の健康的な生活や健康のとらえ方，健康の保持増進について，学生は自分の実体験から学ぶことができていた．また，健康概念の深い理解と健康と健康増進を支援する環境の関係の理解も出来ていた．一方で，学生は，直接的接触がなかった領域の対象理解，健康課題とニーズ，看護の視点については達成状況に課題があった．考察：ヘルスプロモーション実習は，人々の健康を支援する看護の基盤となる学びを得ることができる．直接的接触がなかった領域の対象理解，健康課題とニーズ，看護の視点については感覚的な理解にとどまる直接的経験として認知していると考えられた．概念的な理解に深化する反省的経験を得られるよう，これらの疑問を解消しようとするのではなく，その後の学習機会で活かせるように取り扱うことが教員には求められる．

キーワード：ヘルスプロモーション，臨地実習，看護学生
Key words：health promotion, practice, nursing students

Ⅰ．はじめに

1．本学部の教育理念とカリキュラム

本学部では，「慈悲の心を持った心のケアのできる質の高い人材を育成する」ことを目的として掲げている．その下位目標として（1）豊かな人間性と倫理観を備えた人材（2）看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材（3）ケア環境とチーム体制の整備能力を備えた人材（4）国際社会でも活躍できる人材（5）自己研鑽し，看護実践を改革しうる人材の育成を挙げている．

開学 4 年目を迎え，本学部の目的をより達成できるよう，カリキュラム改正を行った．カリキュラムでは本学部が目指す人材を育成するために，教養教育で自己の基礎力を高めながら，看護学の専門教育では，基礎から応用・実践へと体系的に配置し，看護学の専門教育に進むよう構成した．

1　武蔵野大学看護学部　Musashino University, Faculty of Nursing

看護学の専門教育では，「専門基礎科目」から「看護学・看護実践の基礎」を学び，次に「健康な個人・家族を対象とした看護に関する科目」群，「疾患を持つ個人・家族を対象とした看護に関する科目」群，「集団・地域の健康問題に関わる看護に関する科目」群を段階的に配置した．そして臨地実習は，群ごとに到達目標を設定し，講義と演習で得た知識，技術を統合，深化できるよう配置した．最終学年で，これまでの学びを統合し，看護実践能力をさらに高め，生涯を通じて看護学・看護実践を探究するための基盤を学ぶ「看護統合」の科目群を配置した．

「健康な個人・家族を対象とした看護に関する科目」群においては，各領域の概論で各領域の対象となる個人や家族の健康について学び，その後領域横断的な臨地実習である「ヘルスプロモーション実習」を配置した．ヘルスプロモーション実習では，地域社会で生活する健康的な個人・家族のヘルスプロモーションの実際を体験することを通して，人々の健康的な生活や健康の保持増進，地域で展開している健康に関する活動について看護の視点で考えることを目的とした．

2. ヘルスプロモーション実習の意義

健康とは，WHOの定義によると「病気ではないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態である」(WHO, 2006)．健康は基本的な人権であり，個人は自分の健康な生活を獲得するために自ら取り組まねばならない．

しかし，個人の努力だけでは健康の達成は難しい．そこでWHOは「すべての人に健康を」(Health for All:1984年）実現するために，2大戦略としてプライマリヘルスケア（PHC:Primary Health Care 1978）とヘルスプロモーション（1986年）を打ち出している．

ヘルスプロモーションとは，オタワ憲章（1986年）の中で「人びとが自らの健康をコントロールし，改善することができるようにするプロセスである.」と定義されている（島内，2013)．理念として二つの柱があり，「個人が健康を増進する能力を備えること」と「個人を取り巻く環境を健康に資するように改善すること」であり，必要な活動方法として，①健康な公共政策づくり，②健康を支援する環境づくり，③地域活動の強化，④個人技術の開発，⑤ヘルスサービスの方向転換が打ち出されている（櫻井，斉藤，2006)．

つまり，看護の使命である，人々の健康な生活を実現するためには，個人へのアプローチのみならず，健康を保持，増進する環境を整えていくことが必要なのである．

また，看護師は保健や医療の場に従事することが多く，健康の保持，増進についても，医学的，保健学的アプローチに偏りがちである．しかし，社会情勢の変化，少子高齢化，疾病構造の変化，グローバリーゼーションの広がりの中で，健康の保持，増進の場は家庭や学校，会社，地域社会といった生活の場へと移行し，看護の対象である生活者が望む健康な生活を自ら作り上げるためには幅広いアプローチが必要とされる．

地域で生活をする多様な人々の健康についての活動を体験し，健康を考えるヘルスプロモーション実習は，幅広い健康概念について理解を深め，健康を支える環境への働き掛けも含めた，多様なアプローチを習得することが期待できる．

ヘルスプロモーションの視点は，将来の保健医療を担う人材として身につけるべき価値観と考える．

3. ヘルスプロモーション提唱の背景

世界保健機関（WHO）は，1986年にカナダで行われた国際会議で，健康戦略としてヘルスプロモーションを提唱したオタワ憲章を採択した．

この背景には，当時，WHOヨーロッパ地域事務局のキックブッシュ博士らの功績が大きい．博士らは，人びとの長寿問題，先進国における疾病構造の変化，南北における健康状態の結び付き，健康に関する持続的な不平等といった健康に関する問題を挙げた．そして，これらの諸問題を解決するには，医学的なアプローチには限界があることを指摘し，社会的・政治的な視点を重視すること，健康を構成する要素の再検討と「人びと自身が健康を定義し，それを維持していくことを可能とする環境をつくること」が重要であると強調した（島内，2000)．この考え方のもと，ヘルスプロモーションは，世界的な保健活動の進め方に関する新たな指針として，健康教育と健康を支援する環境との関わりの概念を整理する中から創造された．

また，ヘルスプロモーションは，前述したように1978年にアルマ・マタ宣言として出されたプライマリ・ヘルスケア（PHC:Primary Health Care）とともに，ヘルスフォーオール（Health for All:1984年）を実現するためのWHOの2大健康戦略である．プライマリヘルスケアが，保健医療職を中心とした医学的・保健学的なアプローチを基本とするのに対し，ヘルスプロモーションはコミュニティや生活者を中心とし，相互に補完的な多種類のアプローチを必要としている（櫻井，斉藤，2006)．

4. 日本におけるヘルスプロモーションの普及

日本におけるヘルスプロモーションの普及は，1987年に島内らによって行われた国際シンポジウムに端を発する．その後，島内は日本ヘルスプロモーション学会を組織

し，日本的なヘルスプロモーションの概念図「坂道の図」を示した（斉藤，2006）．その後，地域保健の分野に留まらず，環境学や健康科学の研究へとヘルスプロモーションの思想は普及してきた．

日本の政策にヘルスプロモーションが反映され始めたのは，「アクティブ 80 ヘルスプラン（第 2 次国民健康づくり対策）」における，健康文化都市構造からであり，これまでに 100 以上の市や町で健康と文化を中心概念に据えたまちづくりが展開されている（斉藤，2006）．また，1988 年からの第 3 次国民健康づくり対策における「健康日本 21」には，人生の各段階に特有の健康上の課題と健康を支援する主体として，マスメディア，企業，非営利団体，職場・学校・地域・家庭，保険者，保健医療専門家，行政機関それぞれが取るべき役割が明記されている（厚生労働省）．現在では，この対策を基本とした各都道府県や保健所圏域，各市町村の健康増進計画が策定されている．

5．ヘルスプロモーション実習導入の経緯

前述したような意義のあるヘルスプロモーション実習を当学部で導入したのは，2012 年度からである．

本学では武蔵野 BASIS という全学部横断型の教養教育システムがあり，少人数制のゼミナールやグループワークが設けられている．学生は，グループごとに授業日が若干異なっており，看護の実習を組むことが不可能である．よって，2 年生の基礎看護実習との二本立てでヘルスプロモーション実習が設けられた．2015 年度には 4 年目を迎える．

6．研究目的

本研究の目的は，学生の学びの内容を抽出し，実習目標の到達状況を明らかにし，今後の実習内容・方法を検討することである．

Ⅱ．ヘルスプロモーション実習の紹介

1．ヘルスプロモーション実習の目的

ヘルスプロモーション実習の目的は，「地域社会で生活する健康的な個人・家族のヘルスプロモーションの実際を体験することを通して，人々の健康的な生活や健康の保持増進，地域で展開している健康に関する活動について看護の視点で考える．」である．

2．ヘルスプロモーション実習の目標

ヘルスプロモーション実習の目標と目標ごとの下位項目は以下の通りである．

目標 1． ヘルスプロモーション関連施設の見学や体験を通して，ヘルスプロモーションの実際を知る．

1）ヘルスプロモーション関連施設について，設置主体，職員，意義や役割等の特徴を理解する．

2）関連施設におけるヘルスプロモーションの具体的な取り組みや特徴を理解する．

目標 2． 地域社会で生活する人々の健康的な生活や健康の保持増進について，また地域で展開しているヘルスプロモーションについて，看護の視点で考える．

1）地域社会で暮らしている人々の生活や健康のとらえ方について知る．

2）ヘルスプロモーション関連施設の実際の体験を通して，各ライフステージの健康課題とニーズについて理解を深める．

3）ヘルスプロモーション関連施設の実際の体験を通して，地域で展開している健康に関する活動について看護の視点で考える．

4）初日のグループワーク・実際の体験・まとめのカンファレンスを通して，学生それぞれの学びを共有し，地域で展開している健康に関する活動について，各ライフステージの健康課題やニーズとの関連をふまえ総合的に看護の視点で考える．

3．ヘルスプロモーション実習の概要

ヘルスプロモーション実習は，2 年生の 9 月から 10 月に，3 クールに分け実施している．1 クールあたり学生数は 40 名程度である．実習期間は 2 週間であり，うち 6 日間を実習施設での実習日とし，二つ以上の実習施設での実習を体験する．2013 年度のヘルスプロモーション実習全体での実習施設の種類は，産後ケアセンター（母性），学童クラブ（小児），就労継続支援事業施設（精神），地域活動支援センター（精神），社会福祉協議会福祉会館（老年），企業の健診（検診）機関・健康増進施設（地域），市町村保健センター（地域）など多岐にわたる（カッコ内は担当領域）．施設数は 40 カ所と多いが，一人の学生が体験するのはこれらの施設のうち，2 ～ 3 か所である．初日，1 週目の金曜日，2 週目の木曜日と金曜日の 4 日間が学内演習日である．

4．指導体制

当実習では，実習施設が多岐にわたるため，各領域からヘルスプロモーション実習の担当者が選出され，関連施設との調整や学生指導を行っている．また，実習施設が多岐にわたるため，担当者以外の教員も施設調整や指導にあたっている．

5．実習スケジュール

2週間の実習スケジュールは表1のとおりである．

表1　実習スケジュール

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
1週目	学内演習	小児・老年・精神のうち1領域			学内演習
2週目	母性・地域のうち1領域			学内演習	学内演習

6．学内演習

ヘルスプロモーション実習では，実習の目的・目標を達成するために，特にグループワークを積極的に取り入れ，学生の学びの共有と深化を図っている．

①　学内演習1日目（初日）

全体オリエンテーションにおいて，健康についてのイメージマップを作成するグループワークを実施している．このことにより，学生が自分の思考や固定観念を明確にし，他者との意見交換を通し，健康・健康観・健康増進活動について考えを深められるように支援している．また，実習という学習方法に不慣れな段階にある2年生が実習に対する個人目標を立てることにも役立っている．

②　学内演習2日目（1週目　金曜日）

1週目に実習した領域のグループごとに，ヘルスプロモーション実習の目標に沿った体験と学びを討議する．その後，全体で学びを発表し，共有する．午後は2週目の実習施設のオリエンテーションである．

③　学内演習3日目（2週目　木曜日）

2週目に実習した領域のグループごとに，ヘルスプロモーション実習の目標に沿った体験と学びを討議する．その後，全体で学びを発表し，共有する．午後は翌日の実習全体の学びの共有のための発表準備にあてる．

④　学内演習4日目（2週目　金曜日）

2週間の実習全体を通しての学びを発表する．施設ごとの多様な実習体験を共有できるように，学内1日目と4日目のグループワークは，様々な施設での実習を体験した学生が混在したグループに編成し，同じメンバーでグループワークを実施している．

7．記録や課題

事前課題は，実習開始の2か月前の7月に実施する実習オリエンテーションで学生に説明している．事前課題は，「あなたが考える健康について」，事後課題は，「生活の中の健康とヘルスプロモーションについて」をテーマとしたレポートである．この他，施設のオリエンテーション後に，自分が行く施設の概要や行っている活動について下調べを行うことを課している．これらの他，毎日の記録として日々の実習体験と学びを記録する実習記録用紙，実習最終日にまとめの発表会終了直後に，実習目標それぞれの到達度と総合評価についての自己評価を記入する用紙を用いている．

Ⅲ．研究方法

1．対象者

2013年度のヘルスプロモーション実習を履修した看護学部2年生の112名である．

2．データ収集

実習終了時に全実習記録と同時に提出した自己評価表の自由記述欄の記載内容を分析対象とする．自由記述欄は，実習目標の総合評価として自由に文章で記述することを求めた．

3．分析方法

自己評価表の自由記述欄の記載内容について内容分析を行った．一つの意味内容ごとに切片化し，一次コードとした．内容の類似性からグルーピングを行った．一次コードをまとめ，小項目とし，実習目標の下位項目の内容で分類した．まずは，クールごとに分析したのち，3クール全体を統合した．分析過程においては，各クールの研究者2名で分析を行った．

4．倫理的配慮

提出された実習記録を研究に用いること，成績には関係なく，また，その他いかなる不利益も生じないことを口頭で学生に説明した．研究への使用を拒否する場合は，申し出るように説明した．個人情報を含むデータは匿名化し，分析後に裁断処理した上で破棄した．

Ⅳ．結　果

学生の学びは表2のとおりであった．実習目標を達成していると評価できる内容と目標達成において課題が残っている内容があった．以下，実習目標および大項目ごとの学生の学びを記す．大項目は実習目標の下位項目であり，中項目は一次コードから帰納的に分析した結果である．

1．ヘルスプロモーション関連施設の見学や体験を通して，ヘルスプロモーションの実際を知る．

1）ヘルスプロモーション関連施設の設置主体，職員，意義や役割等の特徴の理解

学生には，事前課題として，実習施設の概要についてま

表2　ヘルスプロモーション実習目標に応じた学生の学びの内容（中項目まで）

大項目 （実習目標の下位項目）	中　項　目
1－1) ヘルスプロモーション関連施設の設置主体，職員，意義や役割等の特徴を理解する	ヘルスプロモーション関連施設の設置主体，職員，意義や役割等の特徴が理解できた
1－2) 関連施設におけるヘルスプロモーションの具体的な取り組みや特徴が理解できた	関連施設におけるヘルスプロモーションの具体的な取り組みや特徴が理解できた
	自分が思っていた以上に施設は健康の保持増進に役立っていた
	関連施設におけるヘルスプロモーションの具体的な取り組みや特徴の理解に課題が残った
2－1) 地域社会で暮らしている人々の生活や健康のとらえ方について知る	実習前の自分の健康観や対象者への偏見に気づき，健康概念が拡大した
	健康は単に病気ではないことをいうのではないとわかった
	看護は多様な健康観を尊重しなければいけない
	地域社会で暮らしている人々の生活や健康について理解できた
	地域社会で暮らしている人々の健康のとらえ方は多様である
	直接触れ合っていない領域の対象者の生活や健康のとらえ方は十分理解できなかった
2－2) 各ライフステージの健康課題とニーズ	各ライフステージの健康課題とニーズが理解できた
	健康課題とニーズはライフステージによって異なることを理解できた
	各ライフステージの健康課題とニーズの理解は十分ではない
2－3) 地域で展開している健康に関する活動について看護の視点で考える	地域で展開している活動が人々のヘルスプロモーションを導いているとわかった
	全ての人への各ライフステージに合った健康を支える施設での活動が必要だと知った
	地域における看護の活躍がわかった
	看護は自分の価値観ではなく，その人の背景に沿って支援する必要がある
2－4) 学内演習で学生それぞれの学びを共有し，総合的に看護の視点で考える	ヘルスプロモーションの概念がわかった
	ヘルスプロモーションを支援する活動の社会的な課題がわかった
	学生個々の意見を共有するグループワークで学びが深まった
	複数回のグループワークの発表で学びが深まった
	看護の視点で考えることは難しい
その他	初めての実習で緊張したが，施設の方々からケアリングの態度を学んだ
	看護を実践するうえで役立つ指針を得た.
	今後の学習への意欲の高まり
	実のある実習だった
	自分が知らない世界を発見できた
	積極的に関わった為，対象者の話を伺うことができた

強調文字：実習到達上の課題

とめることが課されている．そのため，学生は自分が行く実習施設について，施設の事業内容や法的な位置づけ，設置主体，職員体制，利用者の特徴に関する情報をインターネット上から整理した上で実習に臨んでいた．また，実習時に直接施設の職員から聞き取ることで，施設の背景については理解できていた.

2）関連施設におけるヘルスプロモーションの具体的な取り組みや特徴の理解

学生は，施設の活動に直接参加することで，利用者にとっての施設が提供する活動の意味や健康に与える効果について理解できていた．例えば，産後ケアセンターは，孤立しがちな母親と子どもにとって育児相談の場であったり，学童クラブは働く親に代わって放課後の生活指導や居場所を提供している．学生は，産後ケアセンターであれば，施設職員に来所した母親が相談している場面に参加したり，学童クラブであれば，実際に児童と遊び，施設職員と児童の交流を見学したことから，施設における取り組みや特徴を理解し，自分が思っていた以上に施設が健康の保持増進に役立っていることに気づくことができていた.

しかし一方で，施設で提供している取り組みの意義を理解するのが難しかったという意見がある．また，施設の取り組みに関する法律や施策については深く調べる必要性を学生は感じていた.

2. 地域社会で生活する人々の健康的な生活や健康の保持増進について，また地域で展開しているヘルスプロモーションについて，看護の視点で考える.

1）地域社会で暮らしている人々の生活や健康のとらえ方

学生は，実習前に自分が持っていた健康観や対象者への偏見に気づき，健康概念を拡大して再認識できていた．例えば，自分が精神障害への偏見を持っていたことや，自分の健康観が対象者の年齢や環境によっては当てはまらない

ことに気づいていた.

そして，健康は単に病気ではないことをいうのではないこと，看護は多様な健康観を尊重しなければいけないと捉えられていた．また，地域社会で暮らしている人々の生活や健康について理解できており，人々の健康のとらえ方は多様であることに気づけていた.

しかし，自分が実習で直接触れ合っていない領域の対象者の生活や健康のとらえ方を理解することについては課題を感じていた.

2）各ライフステージの健康課題とニーズの理解

学生は，各ライフステージの健康課題とニーズを理解し，それらはライフステージによって異なることを捉えられていた．例えば，発達段階に応じた発達課題，ニーズを理解したり，年代によって健康の在り方や健康への取り組みが変わってくることを考えたりすることができていた.

しかし，コミュニケーションのスキルが未熟だったり，実習先でないためにその領域の対象者に直接話を聞くことができなかったりといったことから，各ライフステージの健康課題とニーズを十分に理解できていないとする意見もあった.

3）地域で展開している健康に関する活動について看護の視点で考える.

学生は，地域で展開している活動が人々のヘルスプロモーションを導いていること，全ての人の各ライフステージに合った健康を支えるための施設での活動の必要性を理解していた．例えば，地域にある施設が，そこで暮らす人々の健康やヘルスプロモーションのための多くの取り組みを行っていることを理解できていた.

また，地域で看護が活躍していることを捉えられていた．例えば，看護師や保健師の活躍の場は病院以外にもあることや，看護とは疾病を持っている人に対して行うだけではなく，健康な人に対してもできることは多いことについて理解していた．そして，看護は自分の価値観ではなく，その人の背景に沿って支援する必要があることに気づいていた.

4）学内演習で学生それぞれの学びを共有し，地域で展開している健康に関する活動について，各ライフステージの健康課題やニーズとの関連をふまえ総合的に看護の視点で考える.

学生は，個人の健康と環境が密接に関わっている特徴をもつヘルスプロモーションの概念の理解ができていた．また，個人のヘルスプロモーションを支援する地域施設の活動の啓発が不足している現状や，不十分な施策を拡充する必要性など，ヘルスプロモーションを支援する活動の社会的な課題についても捉えられていた.

また，学生はグループワークで他の学生の意見を共有したり，複数回のグループワーク内容を発表したりすることで自分の学びを深化させていた.

しかし，看護の視点で考えることの難しさを感じていた.

3. 実習目標以外の学び

学生は，実習目標以外で以下のような学びを得ていた.

まず，学生は初めての実習で緊張する中，施設スタッフに親切に温かく，傾聴的・共感的に接してもらったことによりケアリングの態度の重要性に気づいていた.

また，看護過程の展開に活かせる知識の獲得や看護の役割といった，今後自分が看護を実践する上で役立つ指針を得ていた．その他，今後の学習意欲の高まったこと，実のある実習だった，自分が知らない世界を発見できた，自分が積極的に対象者に関わった為，対象者の話を伺うことができたという達成感についての意見があった.

Ⅴ．考　察

学生の学びをもとに，ヘルスプロモーション実習の実習内容と方法について以下に考察する.

1. ヘルスプロモーション実習の目標の共通理解

医学中央雑誌でヘルスプロモーション，臨地実習，看護をキーワードとし，検索した結果をもとに出版物で紹介されているものに限っては，看護学部でヘルスプロモーション実習を行っているのは，聖路加国際大学（小林，大森，小野，三森，麻原，2013）の「ヘルスプロモーション実習」と産業医科大学産業保健学部看護学科（中谷，池田，石原，2010）の「産業看護学実習」の二つであった．前者の実習先は保健所・保健センター，自治体の敬老館，児童館であり，後者の実習先は労働衛生機関，企業保健センターなどであった．これらと比較すると，当学部のヘルスプロモーション実習の実習先は，産後ケアセンター，学童クラブ，就労継続支援事業施設，地域活動支援センター，社会福祉協議会福祉会館，企業の健診（検診）機関・健康増進施設，市町村保健センターなど，非常に多岐にわたるという特徴を持つ．ヘルスプロモーションは，「人々が自らの健康とその決定因子をコントロールし改善することができるようになるプロセス（バンコク憲章）」である．人々には，各ライフサイクルの段階にある人々が含まれるため，当実習は幅広いライフサイクルにある人の健康や健康増進について知ることができるという利点がある.

しかし，施設で提供している活動が非常に多様であるため，ともすると領域特性の高い学びに帰着する可能性がある．学生の体験がヘルスプロモーション実習の目標に合致した学びにつながるよう，教員が実習目標を共通理解し,

指導に活かしていく必要があると考えられる．

2. 看護の視点で考えることの意味

学生は，看護の視点で考えることの難しさを感じていた．この実習の対象学生は2年生であり，ヘルスプロモーション実習までに基礎看護概論や他の領域の概論は履修済みである．しかし，看護の視点をもって現象をとらえることは初体験である．また，各領域の講義や実習を通して，これから看護の視点を培っていく段階である．このような段階にある学生に看護の視点で考えることを要求するのは時期尚早であるという見方もできるが，後で述べる直接的経験から反省的経験への経験が深化するに伴い，理解が深まっていくものと考えられる．

学生が看護の視点で考えることが難しいことのもう一つの理由は，漠々とした「看護の視点」とだけ学生に明示していることによるだろう．看護の対象だけをとってみても，あらゆる年代の個人，家族，集団，地域社会（日本看護協会，2003）と広範である．さらに各領域の対象者において重要な看護上の観点もある．ヘルスプロモーション実習においては，対象者があらゆるライフサイクルにある個人，家族，集団，地域社会であることをふまえ，多様な観点からの看護の視点を生かした学びが共有できるようにすることが必要だと考えられる．

今回の分析結果からは，学生は健康概念の理解，あらゆるライフサイクルにある方々のヘルスプロモーションについて本実習で理解を深めることができていたことがわかった．領域横断型で行っているからこそ，幅広い年代，個人，家族，集団という幅広い健康についての学習ができる．このように人々の健康のありようを理解することができるヘルスプロモーション実習での学びは，病院での実習において看護学生が患者の退院後の生活をイメージするのを助け，地域での実習においては個人のヘルスプロモーションを支援しやすくするであろう．健康とヘルスプロモーションを理解することは，健康を支援する看護の使命を達成するのに必要な学びである．

3. 施設の法的基盤や社会福祉制度とヘルスプロモーションの関連の理解

学生は，施設におけるヘルスプロモーションを支援する活動についての設置主体，職員，意義や役割，取り組みの特徴の理解はできていた．しかし，ヘルスプロモーションを支援する活動が，どのような法的基盤や社会福祉制度によって作られているかに関する理解には課題が残った．当該実習で必要となる健康施策や社会福祉制度の学習が全て履修し終わっているわけではないため，学生によっては初めて耳にする制度もあるのは事実であり，理解は簡単ではないだろう．しかし，ヘルスプロモーションが，「個人が健康を増進する能力を備えること」と「個人を取り巻く環境を健康に資するように改善すること」であり，健康増進には政策によって作り出される環境が大きく寄与していることは押さえたい学習内容である．法的基盤や社会福祉制度についての深い理解は後続学年の学習で補完されるが，環境と健康の関わり合いがわかるように，法的基盤や社会福祉制度について解説することは必要であると考える．

4. 直接的経験から反省的経験へ

ヘルスプロモーション実習の実習目標のうち，学生の到達状況に課題が残った以下の点については，実習以降の学習経験によって補完される内容であると考えられた．つまり，直接触れ合っていない領域の対象者の生活や健康のとらえ方，各ライフステージの健康課題とニーズ，看護の視点で考えることについては，各領域の看護方法論，領域別実習を通して学習される内容でもある．

「経験」は，洗練された概念的認知的地位を獲得していない直接的経験をもとに，概念的に明晰で普遍的な要素が見いだせる反省的経験へと，そしてまた直接的経験という方向に進む（早川，1994）．つまり，学生はヘルスプロモーション実習において，直接的には接触がなかった領域の対象理解，健康課題とニーズ，看護の視点については感覚的な理解にとどまる直接的経験として認知し，その後の学習体験を経て，概念的な理解に深化する反省的経験を得られるものと考えられる．接触していない対象の生活はどのようなものなのか，健康課題やニーズは何か，看護の視点で考えるとはどういうことなのかという疑問を教員は解消しようとするのではなく，その後の学習機会で活かせるように支援することが求められる．

Ⅵ. おわりに

本稿では，ヘルスプロモーション実習の学生の学びから，実習内容・方法の評価を行った．実習目標のうち，いくつかの点で達成状況に課題があったが，それらは学生にとっての直接的経験として解釈することができた．これらの直接的経験を反省的経験へと発展できるよう学生を支援することが重要である．

引用文献

早川 操（1994）．デューイの探求教育哲学 — 相互成長をめざす人間形成論再考 — 愛知：*名古屋大学出版会*．

小林真朝，大森純子，小野若菜子，三森寧子，麻原きよみ(2013)．ヘルスプロモーション実習における実習の場による学びの特徴．*聖路加看護大学紀要* 39，95-100.

厚生労働省．健康日本21（総論）．*第７章 環境整備とその実施主体の役割*.
http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/s0.html 2015.7.15

中谷淳子，池田智子，石原逸子（2010）．産業看護学実習の目標到達度と実習内容の関連．*産業医科大学雑誌*，32（1），83-92.

斉藤恭平（2006）．ヘルスプロモーションの変換．大西和子，櫻井しのぶ編集．成人看護学 ヘルスプロモーション（pp12-16）．東京，ヌーヴェルヒロカワ

櫻井しのぶ，斉藤恭平（2006）．ヘルスプロモーションとは．大西和子，櫻井しのぶ編集．成人看護学 ヘルスプロモーション（pp4-6）．東京，ヌーヴェルヒロカワ．

島内憲夫，助友裕子（2000）．Health Promotion 21世紀の健康戦略（別巻Ⅰ）改訂増補ヘルスプロモーションのすすめ ～地球サイズの愛は，自分らしく生きるために！～．東京，垣内出版株式会社．

島内憲夫，鈴木美奈子（2013）．ヘルスプロモーション WHO：オタワ憲章．東京，垣内出版．

日本看護協会．(2003)．看護者の倫理綱領，
https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/pdf/rinri.pdf 2015.7.15

WHO（2006）．WHO憲章，
http://apps.who.int/gb/bd/PDF/bd47/EN/constitution-en.pdf?ua=1&ua=1 2015.11.09